説教20220605ヨシュア1：6-9使徒言行録2：1-11「ヨルダン川を渡るとき」

今日は聖霊降臨日です。私たちは毎年こうして聖霊降臨日を迎え、聖霊が降臨したのを記念し、ますます聖霊に満たされる喜びを深く味わって参りましょう。

聖霊に満たされる、というのはどういうことでしょうか。或る注解では、聖霊に満たされていくことは、私たちが、地の塩にされることであり、聖霊の賜物を広めていくことは、私たちが、世の光となることである、という様に言っていましたが、なかなかわかり易いですね。

聖霊が、わたしの内側に深く深くはたらいていくとき、私は聖霊に、私自身を明け渡して、私は聖霊なる神によって動かされ、統治され、私の思いと言葉と行いは、聖霊なる神によって動かされるのです。といっても、わたし自身がなくなってしまうわけではありません。例えば、大根を塩漬けにして漬物にするとき、塩を加えれば加えるほど、その大根は、腐ることがないという性質を備えてきますが、それでも、それは大根のままです。塩を加えることによって、大根がニンジンに変化するわけではないのです。このたとえと同様に、私の中に聖霊がどんどんと入って来て、私が聖霊に統治されるようになっても、私が神様になったり或いは、あなたになったりすることはないのです。

私が聖霊に満たされるというのは、この様に私の内に塩が注入されて、私が朽ちないものとされてゆき、そして塩によって動かされ統治されまた保たれるということです。

今日の旧約と新約の聖書箇所を読んでみますと、両者にはどのような関連があるのでしょうか。一読しただけでは分からないかもしれません。が、両者には、聖霊に満たされるとき、という共通点があるでしょう。今、ヨシュア達、神の民はヨルダン川を前にして、神の言葉を聞いています。主なる神は言います。「わたしは、強く雄々しくあれと命じたではないか。うろたえてはならない。おののいてはならない。あなたがどこに行ってもあなたの神、主は共にいる。」

この御言葉は、主なる神が昼も夜も私たちに聞かせて下さる言葉でありますが、新約聖書でいうならば、この「あなたがどこに行ってもあなたの神、主は共にいる。」という御言葉こそ、聖霊の神であり、この言葉が私たちの内にどんどんと満ちてくるようであります。私たちは、いつ何時もこの御言葉から逃れることが出来ないのですが、ヨシュアたち神の民が今、直面している、ヨルダン川を渡ろうとするとき、という状況にあっては、聖霊の満たしも、更に高まったことでありましょう。といいますのは、向こう岸にエリコの町を控えたヨルダン川というところが、聖霊に満ち満ちた場所であることを私たちは知っているからです。そこは主イエスが洗礼者ヨハネから洗礼を受けた場所であります。マタイによる福音書３章16節から

「イエスは洗礼を受けると、すぐ水の中から上がられた。そのとき、天がイエスに向かって開いた。イエスは、神の霊が鳩のように御自分の上に降って来るのを御覧になった。そのとき、「これはわたしの愛する子、わたしの心にう者」と言う声が、天から聞こえた。」

この様に、このヨルダン川の水辺で、天からイエス様のうちに、神の霊、即ち聖霊がハトの様に降り注いだのであります。

さて、このヨルダン川の水辺というのは、どんなところでしょうか。それを、今のガイドブックで確認しますと、灌木が茂る農村地帯に、川幅10メートルに満たない小川が流れている風景が載っています。取り立てて風光明媚な場所ではありません。どちらかといえば平凡な、熱帯地方の緑豊かな水辺の景色が広がっているのです。主イエスキリスト受洗の地といったような記念碑的な建物が立っているので、それとは分かりますが、それがなければ、どこにでもあるような、小川の岸辺なのです。

でも、実はこの、どこにでもあるような小川の岸辺というのが重要なのだと思います。川というのは、小川であろうが大河であろうが、人間にとって、一つの重要な意味を持ちえます。その意味というのは、向こう岸とこちら側とを分かつという意味です。向こうに住む人とこちらに住む人が違う人々であることを、一つの川が言い表すことが出来るのです。日本にも境川という小川があちこちにありますが、その境川はその昔、お国とお国との境界線になったところもあるでしょう。境川でお国とお国が分けられますと、だんだんと、両国の交流は制限されていき、それぞれの国に独自の言葉や風習や文化が醸し出されていったことでしょう。

この様に、私たちは、日常生活のうちに出くわす、小川の岸辺に立たされるとき、ちょっと大げさに言うならば、向こう岸に広がる、違った世界に目を向け、そこに足を踏み入れようとする勇気や奮起を促されている、と言ってよいでしょう。

さてヨシュアら神の民らが立っているヨルダン川の岸辺の向こう側には、エリコの町があります。そこは乳と蜜の流れる、神様が約束された地であり、神の民は、その地で平和のうちに暮らすことが約束されていました。でも乳と蜜の流れるその地には偶像を崇拝する人たちもいました。悪い霊に支配されている人たちもいました。その人たちは巨人であり力も強くてその土地を制圧していました。ですから、神の民が簡単に乳と蜜の流れるその地に入れるわけではなかったのです。向こう岸のそういった実情を神の民は、このとき既に知っていました。

民数記 13章 32節

偵察した地について、イスラエルの人々の間に悪い噂を広めて言った。「私たちが偵察のために行き巡った地は、そこに住もうとする者を食い尽くす地だ。私たちがそこで見た民は皆、巨人だった。

この様に、神の民は、すでに乳と蜜の流れる地を偵察して、その地に関する情報を得ていたのでした。神の民は、この噂によって流された悪い情報に左右されて、乳と蜜の流れる地を目指すべきか、或いは、エジプトに戻って奴隷として養われるのか、という岐路に立たされ続けてきました。荒れ野の４０年のさまよいは、このような心の迷いがなさしめた業でもあったでしょう。

そして今や神の民の目の前には、ヨルダン川が流れ、その向こうには乳と蜜の流れる地が広がっているのです。ヨルダン川は、渡ろうと思えば３分とかからない小川であり、その気さえあれば、神の民は今、ヨルダン川を渡ることが出来るのです。

でも、ここが一番肝心なところですが、簡単なことであっても、その気がなければそれを行うことが出来ません。

このとき聞かれた神の声を再び聴きましょう。「わたしは、強く雄々しくあれと命じたではないか。うろたえてはならない。おののいてはならない。あなたがどこに行ってもあなたの神、主は共にいる。」

ヨルダン川を前にしてやはり神の民は、向こう岸にいる巨人たちのことを想って、うろたえていたのでした。「こんな川ならすぐに渡れるけれども、向こう岸には巨人たちがいるから、神よ、お言葉ですが、川を渡るのはまた今度にさせて下さい、」といった神の民の、人間的な言葉が聞こえてきそうな状況であります。

いつでも出来ることだから、また今度、という先延ばしの態度は、今の私たちもよくやってしまうことでしょう。不思議なもので、人間は、出来なさそうで簡単ではないことのほうに惹かれて、そっちの方には一生懸命取り組むけれど、いつでもできる簡単なことは何時まで経ってもほったらかしているということがあります。

そこら辺の人間の悪い癖といいますか悪い習慣を、私たちの内に満たされた聖霊は、その都度指摘し、修正してくださいます。「あなたがどこに行ってもあなたの神、主は共にいる。」という神の声は、私たちが、どこにいても、どんな時でも、神様が共にいて、なすべきことをその都度、語って下さる、ということです。これはまさに聖霊なる神の働きであります。

パウロは次の様に聖霊なる神の声を聞きました。

使徒言行録 22章6節から

「旅を続けてダマスコに近づいたときのこと、真昼ごろ、突然、天から強い光がわたしの周りを照らしました。わたしは地面に倒れ、『サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか』と言う声を聞いたのです。『主よ、あなたはどなたですか』と尋ねると、『わたしは、あなたが迫害しているナザレのイエスである』と答えがありました。一緒にいた人々は、その光は見たのですが、わたしに話しかけた方の声は聞きませんでした。

『主よ、どうしたらよいでしょうか』と申しますと、主は、『立ち上がってダマスコへ行け。しなければならないことは、すべてそこで知らされる』と言われました。

いわゆるサウロであったパウロの回心の場面ですが、この『立ち上がってダマスコへ行け。しなければならないことは、すべてそこで知らされる』と言われたのが、聖霊なる神の声です。聖霊なる神は、パウロに、余計なことは考えずに、とにかくダマスコに行ってみなさい、と言われています。余計な事とは、行ってもないダマスコについて今からあれこれ考えても無駄という意味です。今、パウロが為すべきことは、ただ一つ、立ち上がって、ダマスコに向けて足を踏み出すことだけです。でも、少しは目的地について思慮しておくべきなのでは、という反論が聞こえてきそうですが、大体、思い悩んでる人は、将来の目的地について考え尽くしているものなので、これ以上考えても無駄ということなのでしょう。聖霊なる神は、いつでもどこででも私の内に満たされ、私に声を聞かせて、指示して下さいますので、将来の目的地のことについては、先走って、自分の思いを巡らし続けるよりも、その目的地に到着した時に、聖霊なる神の声を聞き、その指示を仰ぐということの方が大切なのです。

ヨルダン川を前にしたヨシュアら神の民もそしてパウロも、将来の目的地を前にして、聖霊に満たされ、聖霊の声を聞きその指示を仰いだという点で、共通していますが、彼らの姿は、今の私たちクリスチャンの姿でもあります。私たちも日々、小さな小川を渡り続けているようなものです。将来どうなるかということは、私たちの大きな関心事であります。そしてそれが大きければ大きいほど、私たちは自分の思いに取り付かれて、小さな小川を渡れなくされてしまいます。そんなとき私たちは聖霊に満たされて、いつも聖霊の声を聞き、それに聞き従う者とされて、その小川を渡らせて頂きましょう。

又、聖霊とは、私たちを満たす一つの霊であり、それは「知恵と識別の霊／思慮と勇気の霊／主を知り、畏れ敬う霊。」であります。

イザヤ書/ 11章 01節～「エッサイの株からひとつの芽が萌えいで／その根からひとつの若枝が育ち　その上に主の霊がとどまる。知恵と識別の霊／思慮と勇気の霊／主を知り、畏れ敬う霊。」

私たちは、一つの霊に満たされ、一つとされて、常に、目の前にあるヨルダン川を、渡り続けて参りましょう。

祈ります

全ての人の造り主である神よ、主の道を全ての国々に教え、主の救いを全ての国民に告げ知らせて下さい。殊に、聖霊によって全ての地にある教会を導き、これに属する人が、皆、真理を悟り、信仰を持って心を一つにし、平和のうちにあって常に、あなたの正しさを行うことが出来るようにしてください。

あなたは、この地の全ての場所、争いがある処、平和なところ、苦しみがある処、悲しみがある処、全ての場所に、一つの聖霊を送って下さいます。どうかその思慮と分別の霊に私たちが満たされ、全ての争いから身を引き、主の平和のうちに安らい、苦しみを楽しみに、悲しみを喜びに変えて下さる、聖霊の業に自分自身を委ねていくことが出来ますように、わたしたちをつくり変えて下さい。

また、日々の生活のなかで、悩みのある方々一人一人に、あなたが目を留め、あなたが御存じであるその悩みに応じて、これを慰め助け、必要な癒しをお与えください。

今、この社会の中で、焦りと不安のうちに、仕事をされている方々を顧みて下さい。どうか、その困難をチャンスに変え、不安の内に救いの光を見出すことが出来ますよう、あなたの救いの御手を待ち望みます。

私たちが聖霊に満たされ、あなたの救いの御手の内に守られながら、何処に在りましても恐れることなく、あなたの平和を告げ知らせ、戦争、分裂、争いを憎まれるあなたの御心に従って、この身を捧げていくことが出来ますように。

父と聖霊と共に一体であって